

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 繁樹 江里

本論文は、コミュニケーションにおいてその受け手の態度や行動、考え方に対して否定的な発言を行う「ネガティブ・フィードバック」(以下略記して NF)が、対人関係に及ぼす効果について、社会心理学の視点から理論分析・実証分析を行ったものである。日常のコミュニケーションにおいて、このような NF は多々生じているが、それがもたらすプラスとマイナスの効果は体系的に検討されてこなかった。だが、リスクある意思決定(会社の中での失敗隠しなど)や集団間接触(異文化間コミュニケーションなど)のような多様な場面で、NF が適切に機能することは、事故や社会的問題を未然に封じる可能性を持ち、さらに発展的な関係を築く決定的な意味を有する。したがって NF 研究は日常場面の心理の検討に留まらず、社会的な含意の大きな研究だと考えられる。

論文の緒論においては、NF に関連する既存の研究では対人的にポジティブな効果をもたらす側面の検討が欠落している点が指摘され、NF の両価的な特性が明らかとなる。これを受けて三部構成で実証研究がなされる。第1部では、NF のもたらす対人的な効果の両価性を検討するために、日常の対人関係をターゲットとした日本人成人のサンプリング調査データを用いた研究が進められた。研究1、2では、NF を認知することで、受け手がその対人関係を自己成長化関係として評価するか自己安定化関係として評価するかが両価性のポイントであることを解明している。研究3、4では、NF の効果が NF のもたらすフェイス脅威度の強弱に依存する点を検討している。そして対等な関係や親密関係においては NF の関係促進効果が示され、受け手が目下の条件下で関係阻害効果が析出された。第2部では、NF がダイアド間の相互作用に基づくことに着目している。研究5、6では、コミュニケーションの送り手と受け手の双方から回答を得る、スノーボールサンプリングによるダイアドデータを用い、NF 認知の正確性や NF の双方向性の持つ意味を検討している。NF 認知における受け手自身の NF の投影について安定的な効果が見られたものの、条件依存的に正確さ自体の効果が見いだされている。さらに、自己成長化関係としての評価は受け手の一方的な NF 時には低下し、自己安定化関係としての評価は送り手の一方的な NF 時には低下することが示され、双方向性を考慮する必要性が明らかとなった。第3部では、応用的視点から在日留学生の適応と日本人ホストの NF の連関を検討し、研究の多様な応用可能性が探られている。

結果として本論文は、これまでの対人的コミュニケーション研究の欠陥をつき、かつ高度な社会調査手法を通じて NF の両価性に関わる諸仮説の実証を果たしている。仮に問題があるとすれば、それは常に流れゆく日常のコミュニケーションを一時点で切り取って検討する手法として社会調査手法がどこまで追いつけるかにあるだろう。これは今後の課題としておきたい。以上によって著者が研究者として十分な能力を有することが示されているので、本審査委員会は博士(社会心理学)の学位を授与するに値するものと判断する。